

第五回：村岡の穴場・見所

本日は村岡の近代を物語る場所を少し拾ってみようと思います。

◇河原河内の水車場跡 境川の水を利用し、明治20年頃国鉄鉄橋の少し上に水車場が出来ました。境川の1kmくらい上流から直接水を引き、精米・製粉などを始めました。石臼8基4列は県下では最大級とされ、東は三浦半島、北は保土ヶ谷まで及び、利用するのに泊まり込みで来ました。関東大震災で再起不能となりました。（水車は直径6mもありました）

◇鎌倉石 村岡には垣根やかまどなどに使われた、鎌倉石の石切場が一時30ヶ所もありました。数百万年も前の海底に貯まった火山性の凝灰岩で、火に強く、値段が安くて、加工しやすい特色があり、明治以降の開発地や関東大地震の復興石材などとして、多く使われ、地下6m以上も掘り下げて採ったところもあった様ですが、すべて無くなりました。今鎌倉石の垣根が村岡幼稚園のところに大切に残されています。（今やほとんど文化財級で見かけるとうれいす。）

◇横須賀水道道 県や市そして村岡の地図を見ますと、どれも北西・左上から右下にかけて斜めに1本のほぼ真っ直ぐな線が見えてきます。これは大正7年に通水した横須賀軍港用の水道道です。今の宮ヶ瀬ダムの下、半原から5.3km、直径50cmの水道管で、初めはポンプもなく落差70mを自然流水で、1日1万立米の送水が行われました。戦後は横須賀市の管理となりましたが、水質管理上平成29年に廃止されました。道路際に境界石が残されています。（腐らない水と云う）

◇貝帰坂 高谷にあり「かいがえりさか」とも云われていました。高谷は丘陵に挟まれ、畑が東の山越えの裏河内にあり、この坂を越えて行きました。そしてここは古くは鎌倉上ノ道とされ、また近くは、大船方面から藤沢に通じる重要な道でした。名前の由来は、大船方面から来た人が、山が高く急なため帰ってしまう、とか、まだ海だった頃貝殻も越せずに戻ってしまったなど、明治28年の切り下げ工事の時の記念碑がありますが、深沢、玉縄、茅ヶ崎の人々、また藤沢では人力車組合や縁日商人組合の寄進者名があります。（貝殻の化石が出る崖があって付いた名とみられますが、今全く崩されました。）

◇小塚トンネル跡 小塚の集落も高谷と同じように、坂のある丘陵を越えた玉縄耕地に広く畑がありましたが、鍬や肥料を担ぎ山坂を越えるのは、大変な苦勞でした。元々河内の畑は水害が多く不安定のところ、大正時代始めに柏尾川が改良され、生産も上がったことから、村の有志5人が丘陵にトンネルを掘ろうと云うことになりました。大正8年から関東大震災を挟んで昭和2年までの9年間、長さ45mのトンネルと、364mの道路を完成しました。今は宅地造成のため山ごとなくなってしまうりましたが、跡に記念碑が残っています。（初めは誰も本気にせず手伝ってもくれなかったと云います。）

◇ナウマン象の化石発掘地 昭和50年から55年にかけて2回の調査が行われ、天嶽院の北側の造成地から、13万年前のナウマン象の化石が、一頭分発掘されました。残念ながら頭

の部分の骨は見つかりませんが、ほかの處で出た頭などの骨と併せて、小田原の「生命の星 地球博物館」で骨格を復元し、レプリカが展示されています。

温暖化による大海進期の時代で、古相模川の一支流で静かな沼地に埋もれていたものと考えられています。

◇**村岡東部土地区画整理事業記念碑** 村岡城址にあり、昭和51年建設の区画整理完成記念です。大きな石を集めて出来ております。江戸城の石垣に使われたもので、前回の東京オリンピックの時、高速道路建設のため一部を取り外されたものと云います。江戸城の築城時、伊豆から船で運ばれた小松石で、献納した大名などの刻印が見られます。

◇**疱瘡神** 宮前御霊神社の境内に疱瘡神を祀ったお堂があります。姥神ともいい、大庭御厨を開いた鎌倉銀五郎景政が勧請したと云われます。疫病退散を願い、川名御霊神社や柄沢隆昌院にも祠があります。また、弥勒寺の弥勒堂の脇にもあったと云われ、弥勒寺の伝承に、鎌倉時代末期まだ法泉寺と言われたころ、村に疫病がはやり、日蓮宗の僧が厚木の依知へ行く時、疫病退散を祈ってご利益を得たと云います。その時霊夢を感じて古井戸から弥勒像を探しだし裏山に祀ったと云います。弥勒寺は厚木の妙純寺の末寺でした。依知は日蓮上人星くだりの梅で有名です。

今、村岡の開発は一段落のようですが、JRの湘南貨物駅跡に、公民館の移転や新駅開設の構想が話題になり、また鎌倉側には鎌倉市役所の移転計画の話も聞かれます。

最後に村岡旧7か村の地名の由来について簡単に 神社やお寺に由来するのが宮前と弥勒寺のニヶ所、地形に由来するのが、丘陵に囲まれた高谷と柏尾川のある川名と古戦場の塚があった小塚、大昔海だったあたりを渡って行くところだった渡内などの4ヶ所です。柄沢だけは、帰化人、唐の人がいた、とか、柄沢のカラはエとも読むので鋤などの柄を造っていたとか、藤原鎌足が鎌の柄を埋めたところ（鎌倉浄妙寺の鎌足稻荷に同じ伝承があります。）など諸説があり、地名に由来にかかわる一つのパターンを示しています。地名に興味を持つきっかけとなればと思います。

地名の会はこれからも色々な行事を通じて、皆さまに郷土の歴史・地理・民俗・伝承などを伝え、多くの方がふるさと意識を高める機会となればと願っております。（いつでも気軽に入れる会としてホームページに窓口を開けております。）